

指導者や保護者として大切にしたいこと

広島地区ミニバスケットボール連盟

副会長 大庭 浩資

(2018年8月31日)

第100回目の、夏の甲子園大会が終わりました。

大阪桐蔭高校の史上初2度目の春夏連覇や、秋田金足農業高校の大健闘など、話題の多い大会でした。

そんな中、二つのエピソードが目にとまりましたのでお伝えします。

ミニバスケットボールを指導する我々にも、何かを示唆してくれるものだと思います、私の私見も含めて紹介しますので、今後、何かの機会で話題に取り上げていただければ幸いです。

<エピソードその1>

長野県代表の佐久長聖高校が試合で負けた後、新聞記者によるインタビューで、次のような質問がありました。

それは1点差を追う場面で、ノーアウトでランナーが出ましたが、次の打者の時にヒットエンドランを作戦として選び、結果、打球はピッチャーゴロで、ダブルプレイとなったものについてです。

「1点差で負けていて、ノーアウトでランナーが出ました。あそこは送りバントが作戦として良かったのではないですか。ヒットエンドランは無理があったように思いますが。」

すると、藤原弘介（PL学園出身）監督は、「結果として点は入りませんでした。あの場面ではベストの作戦だと思います。」とはっきりした口調で答えました。そしてその顔はとてもすがすがしいものでした。

それを聞いていた、元PL学園監督の中村順司氏は、次のような談話を寄せています。

「周りの人がなんと言おうと、選手を一番よく知る監督が選択した作戦がベストなのです。つまり、あの場面でヒットエンドラン選択したのは正解です。ただ一つだけ付け加えるならば、ヒットエンドランの時は、打者はセンター方向へは打たず、一二塁間か三遊間へ打たなければいけないのが基本です。」

私は、この中村順司氏の話に感銘しました。

一つは「選手を一番よく知る監督が選択した作戦がベストである」という点です。

ミニバスケットボールにおいても、いろいろな作戦が考えられる場面がありますが、その時の選択のもとになるのは、「選手理解（児童理解）」「チーム理解」であると思います。

そのためには、日頃からの練習において、ミニバスケットボールの技術を指導することはもちろんのこと、選手としっかりコミュニケーションをとり、選手のことを理解しておくことが必要です。選手のことを理解すれば、一つの失敗に対する叱り方や指導も自然に変わってきます。当然、よりよい方向に向かう叱り方や指導になるはずですが、そこには、愛情あふれる厳しい指導はあっても、暴力や暴言、また無視や差別など存在するはずはありません。

もう一つは、「ヒットエンドランの時は、打者はセンター方向へは打ってはいけない」というコメントです。

藤原監督は、中村元監督の教え子です。わたしにはこのコメントは、「おまえの作戦は間違っていない。ただ、打球をセンター方向へ打たせたのは、おまえの指導不足だ。基本の部分がまだ足りない。基本を教えることを忘れず、これからも精進しなさい。」と叱咤激励しているように感じるのですが、皆さんはいかがでしょう？

<エピソードその2>

史上初2度目の春夏連覇へ導いた、大阪桐蔭高校の西谷浩一監督は、今まで以上に多くの監督さんから目標にされることでしょう。

この西谷監督が、「これまでの指導者としての経験として、忘れられないことを一つあげるとしたらどんなことですか？」と聞かれたときに次のような話をされています。

それは、西谷監督がまだ若きコーチ時代のことです。当時はPL学園が全盛期で、大阪桐蔭高校は手も足も出ない時期でした。どんなに選手を集めても、どんなに厳しい練習をしても、PL学園の中村監督の壁は厚く、何回もはね返されました。そして迎えたある年の大阪府大会の準々決勝で、ついにPL学園に勝つことができました。当時の西谷コーチの喜びはそれはそれは相当なものであったことは想像できます。

しかし西谷コーチを驚かせたのは、その試合の後のことです。試合後、球場の外で選手と喜びを分かち合っていると、そこへ、PL学園の中村監督が来られたそうです。そして西谷コーチにこう言われました。「西谷君、おめでとう。これまで本当によくがんばってきたね。でも監督もコーチも選手も、PL学園に勝って今は浮かれている。このまま明日の準決勝を迎えると、足下をすくわれるぞ。それをしっかり締めるのは、コーチであるあな

たの役目だぞ。」これを聞いた西谷コーチは、鳥肌が立ったそうです。そして改めて中村監督の偉大さを感じたそうです。

迎えた翌日の準決勝で、大阪桐蔭高校は敗れました。その後数年間は、またPL学園の天下が続くことになるのです。

わたしはこの話を聞いて、西谷監督（当時はコーチ）が、思い出の一番にあげられる理由が分かるような気がします。そして二つのことを感じました。

一つ目は、中村順司氏の、たとえ相手が無名のコーチであろうとも、努力している指導者に対してリスペクトの気持を持っていることです。試合で負けたときには、中村監督は悔しく無念であったに違いありません。にもかかわらず、自ら相手の指導者のところへ赴き、激励の言葉をかけるなど、なかなかできることではありません。この話一つとっても中村監督が、多くの教え子や指導者から、慕われたり尊敬されたりするゆえんなのでしょう。

二つ目は、この時の話を西谷監督がこれまで忘れず、自分の指導の原点にされていることです。大阪桐蔭高校というと、誰もが認める現世代の最強チームです。その監督さんが、遠い昔の、ほんの一瞬の出来事を忘れず、そして今でも感謝の気持を持っておられることは、本当にすばらしいことだと思います。

我々指導者（保護者）は、今、目の前で一生懸命がんばっているチームや子供たちに、試合で勝つ喜びを味あわせてやりたいと思うのは当然のことです。しかし一方で勝つことだけでなく、子供たちの心身が健全に成長することも願っています。

どのチームの指導者も保護者も、子供たちのために頑張っておられます。だからこそ、同じ目標に向かって頑張っている仲間（指導者や保護者など）に対して、お互いリスペクトの気持を忘れてはなりません。謙虚な姿勢を忘れず、他の指導者や保護者（年上、年下に関わらず）に学ぶことが大切です。また時には子供たちからいろいろなことを教えられることもあります。

今後も指導者や保護者として、今以上チームの枠を超えた交流を続け、互いに学ぶことが、我々自身を高め、そしてそれが子供たちの成長につながるのではないかと思います。